

3.2 米国における普及期のパーティカル式ファイリングシステムが持った画期的な特性とは？

パーティカル式ファイリングシステムの特性と言え、誰に聞いてもおそらく第1に挙げるのは、「パーティカルフォルダの利用」ではないかと思えますし、米国でこのパーティカルフォルダがどれほど好まれているのかについては、前節3.1で触れましたが、筆者はシステムの冠に置かれるこのフォルダがこのシステムを象徴するものだとは言えても、米国にとって、あるいは文書管理の歴史において画期的と言える特性を持っていたとは考えていません。

パーティカルフォルダは、後述する真に画期的な特性の内の1つであると筆者が考える「ガイドサイン型検索」のための用具に過ぎず、またパーティカルフォルダが使われず、例えば簿冊が使用されたとしても、ガイド型検索方式の画期性とその効果が失われはしないと考えるからです。また筆者がこの後第2の特質として挙げる「標準化」でも、第3に挙げる「組織的意思決定の手段としてのシステムであったこと」も、必ずしもこのフォルダの存在を必須としないか、必要としてもその役割は限定的だったと考えています。

3.2.1 画期性の第1は米国人の気質に合致した「ガイドサイン型検索」、そしてその魅力

(1) 映画の1シーンに見る米国人の嗜好性

パーティカル式ファイリングシステムを考える時、なぜか必ず頭に思い浮かべてしまう映画のシーンがあります。

インディー・ジョーンズシリーズの映画「レイダース/失われたアーク《聖櫃》」のENDマークが出る直前のシーン（下の図表C3.2_01上段参照）、木板で梱包された大きな箱が縦横一面に置かれている巨大な倉庫の通路を、管理人と思しき男が、「聖櫃」が格納されている梱包を台車に載せて、ゆっくり、重そうに進んで行き指定の区画位置で左に曲がって消えてゆくというシーンがそれです。この映画のファンの方たちの間では、例の「エリア51」にある政府の秘密倉庫なのだそうです。

図表 C3.2_01 上図「レイダース/失われたアーク《聖櫃》」 下図「クリスタル・スカルの王国」より



出典 上：Movieclips <https://www.youtube.com/watch?v=FRPOMBNoieY> (2020.7.14)

下：Next Play https://www.youtube.com/watch?v=W5gk7P4llwk&list=PLK_bvW5_MNS7AOwCyB1PFLfROleJZ07qx&index=2 (2020.7.14)

同じシリーズ最新作の「インディー・ジョーンズ/クリスタル・スカルの王国」でも、この巨大倉庫のシーンが映画導入部で映し出されるのですが、このシーンは格納ではなく、どこかにあるはずの必要な梱包を探して歩き進む様子が映し出されています。（上の図表C3.2_01下段参照）

この映画談議が、パーティカル式ファイリングシステムの理解に必要なものなのか・・・と疑問を抱かれる方がいることは当然のことだと思います。

この映画の倉庫シーンを最初に見たときに、一種の衝撃を受けてしまった筆者自身、すぐにはその理由が思い当たらなかったのですが、映画館を出るころには、筆者が感じたものが、米国人が持つ巨大で遥かに広大な面積を持つ構造物への強い嗜好性と、その中を、何らかの形で置かれているガイドサインに導かれて移動し目的に到るという主導的で直接的な探索行動への傾斜であったことに気づかされたのです。

おそらく欧州や日本の旧世界人が、こういった映画シーンを挿入することなど決して思いつかないでしょう。

19世紀後半以降、米国内においてだけ、なぜバーチカル式ファイリングシステムがあれほどの勢いで普及したのだろうかとの疑問が常日ごろから筆者の脳裏に在り、今後の章節で述べることになる種々の背景が普及に関与していた事も承知の上で、なお、あまりに急速な普及と米国のみに偏している事に対して納得がいかなかった点が、前に述べた映画シーンに垣間見た米国人の嗜好性と行動様式が解消してくれたのです。

映画の巨大倉庫が文書庫ではないことは承知していますが、初期のバーチカル式ファイリングシステムが活躍した場が、大きな面積を占める集中管理方式の文書庫と、その内部に配置されるキャビネット群の中に在ったと信じている筆者には、両者の間の共通性を強く感じることができます。

(2) 第1に挙げるべきバーチカル式ファイリングの面期性はガイドサイン型検索

米国においてバーチカル式ファイリングシステムが受容された主たる原因の1つは、「Move on Foot」、「検索者が自ら足で辿り歩く」という、まさに言葉通りにフットワーク良く、積極的かつ直接的な行動様式が、米国人の気質に非常にマッチしたことにあったのではないかと筆者は考えています。

ガイドサイン型検索方式が米国人の気質に適合したことは、急速な普及を促しましたが、この点はこの検索法から得られた迅速性よりも大きな普及要素だったのではなかったかとさえ筆者は思うのです。

索引簿に頼らずに、場所の区画ごとにあるいはフォルダガイド、フォルダタイトルに記載されている階層的なコードや、組織内で共有されている名称を直接目で追って、必要とするものに到達する検索法について、前出の坂口氏の「アーカイブと文書管理」(27頁他)の文中に検索の方式として「自己索引型」と言う用語がでてきます。

出典が書かれていないので坂口氏ご本人が名付けたものかもしれませんが、「自己索引」と言うとは何かコンピュータによる「AI機能で索引を自動生成して検索する方式」のような印象を受けてしまうのが難点です。

「ガイドサインに従って、希望のものを見つけるために歩きながら探す検索方式(Search method According to the Guide sign to find what you want by Walking)」を「ガイド目視に従った徒歩移動検索」と短縮しようとも考えましたが少し長すぎますし、索引を経ず直接検索すると言う意味での「直接検索」では「ガイドサインを追って移動する」という重要な概念が削れてしまいます。

考えた挙句「ガイドサイン型検索」に落ち着きました。これは本論で扱うファイリングシステムで用いるだけでなく、ほぼ同時代に始まる公開閲覧図書館でのブラウジングを含む図書検索や、百貨店やスーパーなどの大規模小売店での商品の探し方にまで意味を拡張した方式名として、以後本論では「ガイドサイン型検索」の用語を使用することとします。

(3) バーチカル式誕生と同時代に一齐に花開いた他の分野でのガイドサイン型システム

バーチカル式ファイリングシステムに適用されたガイドサイン型検索の斬新さは、決してファイリング分野だけではなく、同時に次に挙げる図書館における閲覧システムや、大規模小売店における陳列や買い物客の誘導システムなど、他の分野でも、まるで桜の花が一時にそろって開きはじめるように、ほぼ同じ時代に出現しています。これらは明らかに同時代の様々な背景を共通基盤として出現したものだと思えるべきでしょう。

上に挙げた3つ以外の分野でも、おそらく同様の背景によって生まれたシステムや仕組みが存在する可能性があります、とりあえずここではバーチカル式ファイリングシステム以

外の2つの分野での新たなシステムについて説明しておきます。

① 図書館の市民利用の普及及び開架式展示・・ガイドサインとブラウジング

図書館の成立は紀元前のアレキサンドリアの図書館や、中世の修道会、貴族が邸内に持つ図書室などがありましたが、収集した本等が極めて高額で貴重品であったために閉架式閲覧方式だったり、開架式展示がしてあっても鎖でつないであったりしているなど、誰でも立ち入って、本を読める、踏み入ることのできる施設ではありませんでした。これは当時の世界の識字率の低さと偏りにも原因があります。

一般庶民が利用する形態に変わるのは18世紀末のフランス革命が契機であり、その後19世紀に入り第1次産業革命を経過する中で中産市民層の人口が増加し、また識字率も上がるにつれて、西欧各国や日本では、現在の形での開架式で自由に閲覧が可能な図書館が一般的となり、多数開設されることになりました。

このような中で、レファレンスデスクで司書に聞き合せて場所を知る方法や索引カードを自分で調べて本のある場所をあらかじめ探しておく方法以外に、最初から自分の足で内を巡り、書架や、書架の棚や、本の背表紙に設けられているガイドサインを辿って目当ての本を探すガイドサイン型検索の方法や、最初から何の本をと定めることなくぶらぶらと見て歩いて、目に留まった表題に興味を引かれた本を手にとって開く、いわゆる「ブラウジング」という本の探し方も行われるようになります。

図表 C3.2_02 現代の図書館での開架式（一部閉架書庫含）図書閲覧の為の各種ガイドサイン



撮影協力：静岡県立中央図書館（青点線枠内は閉架式書庫の様子）

このように自由で柔軟な本の探索方法は、この後3.5.1で述べるバーチカル式ファイリングシステムでの文書庫内でのガイドサイン型検索の仕組みに非常に似通っています。

文書探索の場合と同様に、図書の検索者を誘導するための各種ガイドサイン設備を上図表C3.2_02のように図書館内に設備しています。

図書館には本の名称や著者別の図書カードによる検索や、今日ではコンピュータを用いた検索などがレファレンスサービスとして提供されていますが、このサービスが無く

てもガイドサインを順に追って目的の本にたどり着けることは来訪者には一種の喜びを与えることもあります。

特に「ブラウジング」という、大まかな分野だけを頭に置き、特定の書籍を念頭に置かずに、ぶらぶらとガイドサインと本の表題を目視で追う中で、たまたま想定外の面白い本に行き当たると言う経験は、本読みにとって実に楽しいものです。

② 小売業での対面販売方式からセルフサービス方式への変化・・ガイドサインの出現

バーチャル式ファイリングシステムとほぼ同時代に出現した新しい社会的な仕組みは、図書館システムだけでなく、小売業における新しい販売方式と店舗システムにもその姿を見ることができます。

18世紀半ばまでの欧米、日本の小売業においては、商品は店内には一部しか陳列せず、顧客の注文を聞いて裏の倉庫から商品を取り出してくると言う、いわゆる対面式販売法が一般的でしたが、19世紀半ばの英国のハロッズ（1849年）、パリのボンマルシェ（1952年）、19世紀末には米国のメイシーズなどの百貨店が生まれ、商品を店内に配置する「陳列式販売法」が一般化してゆきます。日本では三越呉服店がデパートメント宣言を出したのは1904年でしたが、それ以前の1895年には本店内の一部を陳列式とし、1900年には全館で陳列式が始まっています。

20世紀に入るとセルフサービス方式をとる小売店が現れ、やがて1910年代にはスーパーマーケットというより新しい販売形態に成長し、後には老舗化した百貨店に代わって大規模小売店舗を代表する存在となって行きます。

このような小売業における販売システム、商品陳列誘導システムは、先に触れた図書館のブラウジング等直接図書検索のシステムと酷似していて、百貨店での陳列式販売法において、入口や各階に売り場平面図を掲げることや、多品種となってゆく商品群を種類ごとに区画を定める中で、各商品分類の売り場に誘導するガイドサインが設置されるようになります。その後登場するスーパーマーケットでは、販売員をフロアに配置する百貨店に対して、完全なセルフサービスに変わったため、なおさらに商品を探して店内を歩き回る客を誘導するガイドサインは必須のものとなってゆきます。

図表 C3.2_03 大型小売店（スーパーマーケット）でのセルフサービス式販売形態とガイドサイン



撮影協力：イオン清水店（静岡市清水区）

(4) 同時代に出現した3つのガイドサイン型システムに通じるもの

バーチャル式ファイリングシステム、前記①の図書館で本を探したい者自身が館内を巡って図書を探し出すシステムと、前記②の小売業における陳列式販売とセルフサービスシステムの3つ挙げたシステムが共通に持つ特性は、レファレンスや専門家案内人の介助無しに

自らの足と目と頭脳により目的を達しようとする点で個人の権利と自由を謳う近代精神の賜物と言えるでしょうし、システムが特定の階層による利用から、不特定の多数の人たちによる利用に拡大された点で、民主主義的性格を持つものだったと言って良いでしょうし、目的の完遂に至る時間を短縮しコストのかかる専門ガイドを不要とした点では、経済的合理性の面でも画期的なものでした。これらはこの時代に無視できない人口にまで成長した富裕な中間階層が自らの利便性のために望み作り上げたシステムです。

米国を主とした第2次産業革命は、この傾向にさらに拍車をかけ、中産階級の人口比率と権利の幅はより大きく高まり、またこのような中産階級が多くを占めることが、国家の安定性や国民の成熟度を測る物差しにまでなっています。

ただし、図書館システムや大規模店舗での来客誘導システムは欧州、米国、日本で共通に普及しますが、パーティカル式ファイリングシステムだけは、米国以外の日本や欧州での普及がはかばかしくありません。

この原因は、第1に、日本を含む欧州各国の組織における文書情報を介した意思決定の仕方が、米国のそれとは違っていたことだと思われます。

意思決定方法における両者の違いについては後述する3.4.1「レジストリ・システムが必要とされた世界とその特性」の中に詳しく書いているのでここではこれ以上触れません。

第2には、最大の特徴であるガイドサイン型検索のための用具や設備を、米国においては「パーティカルフォルダ」や「パーティカルフォルダ専用キャビネット」に固定せざるを得なかったことです。第1の理由を背景として、旧世界ではパーティカルでなければならない必然性が無かったのです。「パーティカルフォルダ等」などを引き擦らずに、「旧システム（レジストリ・システム）を「ガイドサイン型検索」を最大のメリットとする近代的ファイリングシステムに変革する」というだけにしておけば、日本でも欧州でもこの変革を受容することができたはずで

日本においては（米国で言うところの）旧システムは、日本固有の簿冊をベースにしたファイリングシステムの一部が変わりつつ、明治中期以降に官公庁組織に普及し、現代でも多くの官庁に承継されているほどに受容されています。

簿冊は、編綴時点で背表紙にガイドサインを持っており、開架式書架に背表紙を手前に配列し、書架群や、書架、段にガイドサインを設ければ、パーティカル式の用具を用いることなく同等の検索効果が上がるという事実は、図書館におけるガイドサイン型検索の効果を見ればわかることです。

3.2.2 最大の特徴の第2は「プロセスの標準化」が施されたこと

米国における19世紀後半から20世紀にかけての時代の製造業や農業において、重要なキーワードは、マスプロダクションでありこれを成功させるためのStandardization、すなわち標準化です。

この時代に巨大財閥を創始したロックフェラーが、自らの成功の基礎となった石油会社を「スタンダード石油」と名付けたことは、彼が「標準化」の熱烈な信奉者であったことを物語る挿話としてよく知られています。

またこの挿話は、この時代の米国にとって「標準化」は最重要な課題だったことを象徴するものでもありました。

なぜなら米国は多くの人種、民族で構成され、同一人種内でも多数の母語が話され、また言語に象徴される文化もまた混淆した、あらゆる意味でのカオス国家だったからであり、その規模において、このような条件を背負った国家は、過去におけるアレキサンダーによる世界帝国やローマ帝国、モンゴルによる多民族支配のケースはあったものの、同時代の世界では米国以外には存在し得なかったのです。

しかも過去における3つの事例と米国の事情は、異なる民族と輻輳する諸文化の担い手を国家として支配する点では同じでも、国家規模で近代的生産体制を担う労働力として多種多様な人々を組み込むと言う点において全く次元が異なるものであり、その意味においては史上初めての試みでありました。

当時の米国社会は、低年齢からの教育制度の浸透が十分ではない時代であり、また毎年増加

する移民の大多数は近代産業における労働力として雇用されるべき対象であったので、もともと低年齢層からの教育制度の枠には入らない存在であったのです。

個々人が異なる文化、言語、生活習慣、教育水準にある大量の移民労働者と、奴隷を祖とする黒人層、割合は少ないながらも先住民の集団を近代産業組織の一員として参加させるには、まず参加条件として最低限の米英語の読み書きができなければならなかったでしょう。対象労働者の最低限の英米語力を条件として、生産・製造工程（プロセス）を細分化し、各プロセスにおいて行うべき処理を単純化し、かつそれぞれのプロセスに対して固定的で均一なルールを定めて、このプロセスへの参加者全員に理解させること。

さらに最小限の言語能力しかない者でも理解できる簡単で短い文とイメージ描画や図表を組み合わせた手順書、マニュアルを備えることも必要です。

また Elementary School からファイリング教育がなされていると言われる米国では、パーティカル式ファイリングの普及初期から、専門学校、短期大学等で既に教育の場が設けられ、大学教育に及ぶなど、他の国では考えられないような熱心な教育環境が整備されていきます。

標準化されたプロセスを多くの人たちに普遍化させるために行われるこのような教育体制や、そこで使用される教材類自体が、標準化の一部を構成していると捉えることもできます。

本論では、多種多様な人々を構成員として組織的行動に参加させるためにとった対応の全てを「標準化」と呼ぶこととします。

フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』によれば“「標準化 (standardization) という用語は、文脈によって様々な意味を持つ」ものであり、また「標準 (standard) という用語には、相互運用のための広く合意されたガイドラインという意味が含まれ、「標準化」はそのような標準を確立する過程を指すのが一般的である。」と説明しています。また“JIS の定義は「関係する人々の間で利益又は利便が公正に得られるように、統一し、単純化を図る目的で、もの（生産活動の産出物）及びもの以外（組織、責任権限、システム、方法など）について定めた取決め。」(JIS Z 8002:2006)”であるとしています。<https://ja.wikipedia.org/wiki/標準化> (2020.6.30)

本論で、パーティカル式ファイリングシステムに関して「標準化」という用語を用いるについては、「規格化・基準化」、さらには「マニュアル化」、「ガイドライン」とした方が良いのではと迷い、また「標準化」だと JIS 等のように機械部品や製品の一定地域内での相互利用、共用化のための規格の意味にも捉えられかねない危惧もあるかと考えもしたのですが、国の文書管理に関する文書の中に、本論と同様の趣旨での「標準化」の用例（平成 30 年 11 月 19 日 第 70 回公文書管理委員会資料内閣府大臣官房公文書管理課による「資料 2-2 文書ファイル等の名称付与の標準化、行政文書の所在情報管理の仕組み」等）があったため、そのまま「標準化」を用いることにしました。

なお、パーティカル式ファイリングシステムの具体的なプロセスと標準化の例示は、本章 5 節 (3.5) で改めて示すこととなります。

3.2.3 最大の特徴の第 3 は、現代のコンピュータが担う組織の意思決定を支援する高速情報処理システムとして登場したこと

19 世紀半ば以降から 20 世紀にかけての時代、特にその初期において米国が激しく希求したのは、現代なら電算機が行うような、当時の技術水準の範囲内で求め得る情報処理高速化の仕組みだったろうと筆者は考えています。

前項 3.2.2 の標準化も、情報処理の迅速化と言うこの要請に従ったものとも言えます。

この要請がどのような時代背景の中でなされたのかは本章 5 節 (3.5) で詳しく述べるので省略しますが、米国においてパーティカル式ファイリングシステムが、現代人がコンピュータに期待していると同じように、複雑で錯綜し、膨大な量の情報処理の迅速性と正確さをこの時代の技術の中で実現する手段の 1 つとして登場したことこそが最大の特徴であり、またこのシステムの画期性でした。

その意味で、既にコンピュータシステムが情報処理の主役となり、必須となっている現代の我々が見るパーティカル式ファイリングシステムの価値と、普及当時の米国人がこのシステムに見た価値とは明らかに相違しているのです。